2009年度周縁プロジェクトに参加して

── フィールド調査を中心に

松　井　真希子

On Participating in the 2009 ICIS Peripheral Project: centering upon the fieldwork in Vietnam

MATSUI Makiko

関西大学大学院、博士課程後期課程、文学研究科[1)]、文化交渉学専攻では「周縁プロジェクト」が開講されている。これは東アジア文化交渉学専攻生が各専門の研究者の指導や協力のもと、限定された地理的範囲のなかで総合的な野外調査の方法論や実際のあり方を実習することを目的としているものである。2008年度から2009年度に渡る二年間はベトナム・フエを調査地域とし、両年度ともに夏には現地にてフィールド調査が行なわれた。筆者はそのうち2009年度のフィールド調査に参加した。これは大学院生の目線から、本プロジェクトについてフィールド調査を中心に私見を述べるものである。

まずは本プロジェクトがどのように進められたのかを簡単に記しておく。なお、筆者は2009年度にのみ参加したため、ここでは2008年度の活動については言及しない。

本プロジェクトに参加した大学院生のほとんどは、フエはもとよりベトナムについても基礎的な知識を有していなかった。そのため、本プロジェクトは関連資料を読む所から始まった。全く未知の分野の論文を読んで報告するのは困難を窮めた。それと並行して、前年度に現地で収集された文字資料の翻刻も行なわれた。これらの作業が後の自身の調査で活かされるということが当時の院生たちには全くわからず、その多くが不平不満をこぼし、教員や研究員の方と話し合うこともあった。

2009年７月12、13日には彦根にてフィールド調査の予行演習が行なわれた。事前に調査方法について説明されることなく、各自で調査をすることになった。フィールド調査未経験の院生たちは自身でテーマを設定し、調査方法や質問内容を考え、試行錯誤しながらそれぞれ調査を行なった。今思うと、先生方はこのようにして、院生に「知識」としてではなく「経験」としてフィールド調査を理解させたかったのだろうと思う。

こうして事前準備を終え、夏のフィールド調査に臨んだのであった。

1）現、東アジア文化研究科。

院生が参加した調査期間は2009年８月30日から2009年９月８日までの十日間。初日と最終日は移動、５日、６日にはシンポジウムが行なわれ、残りの六日のうち一日が観光に充てられた結果、フィールド調査が行なわれたのは五日間のみであった。

調査地域はベトナム封建王朝、広南阮氏が首都として定めたフエから北へ一キロメートルほど行った所に位置し、華僑や中国系ベトナム人が多く居住していたフオンビン社である。フオンビン社の東にはフオン河という河川が流れている。このフオンビン社にはいくつかの集落があり、タインハー（清河）、ミンフオン（明郷）、ディアリン（地零）、バオビン（褒栄）がフオン河左岸に北から南へ広がっている。

この中でミンフオンは、以前承天明香社と呼ばれた中国人集落のあった地域である。中国本土で明王朝から清王朝へと移行する際、多くの明人が異民族による統治に抵抗してベトナムへと逃れた。このような中国人の流入はベトナムの商業や産業の発展を促し、宗教面にも変化を与えた。現在ミンフオンの北端と南端にそれぞれ位置している天后宮と関聖殿は、それを物語るものである。

今回筆者が参加した調査では、このミンフオン集落を中心に、バオビン集落も調査の対象としていた。

フィールド調査を行なうにあたり、五つの班が組織された。文献収集班、墓碑班、聞取り調査班、市場聞取り班、地理班である。各班にリーダーがおり、院生は毎朝いずれの班に参加するかが発表された。筆者が参加したのはこれらのうち地理班を除いた四班である。以下に筆者の参加した各班の活動を簡単に紹介する。

文献収集班では主に一般家庭の祠堂、家譜、祠堂の管理者に対する聞取り調査が行なわれた。祠堂内の祭壇と家譜の写真撮影とともに、祠堂が建てられた時期、祭祀の対象、管理者の家系や家業などを調査した。

墓碑班では、筆者が参加したいずれの日も大雨であったため、墓地にて調査することができず、寺廟での調査を行なった。そのうちの一日が旧暦の７月15日であったため、盂蘭盆の儀式を調査することができた。儀式を録画するとともに寺廟やそこで保管されている経典の写真撮影、儀式後の食事の際には寺廟の歴史や由来を調査した。

聞取り調査班では村長をはじめ、いくつかの家庭を訪ね、いつから宗教信仰を始めたのか、どこへ参拝しに行くのか、どのような儀式に参加するのかなど、各家庭の宗教信仰状況を調査した。また宗教団体と政治や自治組織との関わりについても調査を行なった。

市場聞取り班では市場やその周辺に居住する人びとを対象に聞き取り調査を行なった。定住の開始時期や商品の仕入れ先など、人や物品の移動や流通について調査を行なった。

調査後ホテルに戻ってからは、班ごとにその日得た情報のすり合わせ、撮影した写真の分類整理、文字資料の翻刻といった作業を行なった。作業が深夜に及ぶこともしばしばであったが、この時には事前準備として行なわれた翻刻作業の経験が活かされた。

以上の調査活動を通して、祭壇や寺廟、文献の撮影技術、聞取り方法やノートの取り方、収集した資料の整理方法などを学ぶことができた。いずれも実際に現場に出て経験することによって初めて習得できる技術といえよう。

しかし、この調査に参加して学んだのは、技術的なことではなく、むしろ人と人との関わりとでもいうべきものであった。

このことに関して一番印象に残っているのは、墓碑班に参加し、盂蘭盆の儀式を調査した時のことである。儀式の後に食事があったことは先述の通りである。その時、その仏寺にいた全員が我々調査班を食事に誘ってくれた。しかも、十種は下らないほどの豪華な料理について一つ一つ丁寧に説明したうえで、我々に食べるようにと微笑みながら優しく勧めてくれたのである。

この一件のみではない。たとえば文献収集班に参加し、家譜の撮影をしていた時、現地の方がさりげなく撮影を補助してくれることがあった。またある時、悪天候により急遽調査地を変更し、アポイントなく突然調査を申し込むことがあった。このような場合を含めて今回調査したベトナムの人々はすべて、全く見ず知らずの外国人の突然の訪問に対し、嫌な顔をするどころかむしろ温かく受け入れ、様々な話を聞かせてくれたのである。

フィールド調査では生身の人と接することによって新たな発見を得ることができる。これは普段文献を研究対象としている筆者にとって非常に新鮮であり、研究というものを見直すいい機会ともなった。

生身の人から得た情報をどのような方法で形に残すのか、発表するのか。それがどのような意味をもつのか、情報提供者に本当に資するものであるのか。

生命を持ち、人格を有し、感情を示し、それぞれがそれぞれの歴史を抱くいわゆる「インフォーマント」と接するには、こちらも研究者としてではなく一人の人として接する必要があるのではないか。

聞取り調査班に参加した際、研究員の一人がさりげなく煙草を現地の方に差し出していたことも印象に残っている。このように豊かな人間性を有する「インフォーマント」を尊重し、思いやり、人対人として心を込めて接することで初めてその「インフォーマント」のための研究を行なうことができるのではないか。

「研究は人々や社会に貢献してこそ意味がある」

このような研究をめぐる疑問や意義は、ごく当たり前のことと思われるかもしれない。しかし単なる無機質な物体である文献とは異なる、「生きた人」を目の前にし、筆者はこのことを痛感したのである。そして、筆者が普段向き合っている文献の向こうには、それを著わした「生きた人」がいたということが改めて認識されたのであった。

こうして調査を終えた院生たちは、それぞれの思いを胸に帰国した。帰国後は今度の調査で学んだことや考えたことをレポートにまとめたり、その後の研究の方向性や経過を話し合ったりするなどした。また2010年７月10、11両日には、本プロジェクトの総括ともいえる学術フォーラム「ベトナム・フエ研究最前線 ── 周辺集落研究からの視点 ──」で教員や研究員の方々が成果報告を行ない、ひとまず「周縁プロジェクト」としてのベトナム・フエの調査は終了した。

最後に蛇足ながら、帰国後の筆者の経験を書いておきたい。筆者は2011年５月に京都の小さな禅寺にて調査する機会を得た。生まれて初めて、たった一人で行なったフィールド調査である。

調査に先立っての資料収集および読み込み。こちらは今までの経験である程度「慣れた」作業である。問題は実地調査である。現場での写真撮影、聞取り調査。フィールド調査は現場で必要な情報を漏れなく収集しなければならない。「ついうっかり」が許されない一人きりの調査に緊張が走る。ごく小さな禅寺であったにもかかわらず、慣れない調査のためにかなりの時間を費やしてしまった。

結果、不十分な点は多々ありつつも、個人的には納得のいく調査を行なうことができた。それはやはり本プロジェクトに参加し、現場に出てフィールド調査を実際に経験したためと思う。

今後も後悔や失敗を幾度となく繰り返すことだろう。しかし、本プロジェクトでの経験や学んだことを活かし、人々や社会に貢献できるような研究をこれからも続けていきたい。